



グリーンポトスニュース

71号：2003年7月

じめじめした梅雨が続いていますが、もうすぐ夏です。プールや海、山と、今から楽しみにしているのではないのでしょうか。夏の体調管理も大切に。そこで、今月の話題は『夏風邪』です。

夏風邪

冬のインフルエンザは、熱も高く、症状が重く、重症化することがありますが、夏風邪は、小児を中心に流行し、症状もあまり重くないことが多いです。溶連菌感染症、ヘルパンギーナ、手足口病などは代表例です。

溶連菌感染症は、溶血性レンサ球菌により発症します。鼻や口などから浸入した溶血性レンサ球菌は1～2日たってから、高熱、のどの痛み、嘔吐、腹痛などの症状をひきおこします。扁桃、咽頭の膿を伴った炎症が起こったり、首の前側のリンパ腺が腫れたりします。菌の持つ毒素により、猩紅熱になることもあります。また、免疫反応で、腎炎やリウマチ熱を引き起こす事もあり、注意が必要です。

ヘルパンギーナは、1～4歳の乳幼児がかかります。発熱とかぜ様の全身症状を伴い、咽頭に赤いリングを持つ小さな水疱があらわれ、それが破れて浅い潰瘍をつくりますが、解熱とともに治ります。糞便から口を介してうつりますから、保育園などで流行します。

手足口病は、小児（半数は2歳以下）に発熱とともに、口の中・手のひら・足の裏に水疱があらわれます。まれに、髄膜炎などを併発することがありますが、基本的には治りやすい病気です。治ってからも、1ヶ月近くは糞便中にウイルスが出ています。

治療法はそれぞれの病気で、違います。熱が出たら、かめざわクリニックに、できるだけ早く受診してください。早めに治療していけば、早く治ります。

残念ながら、予防接種などはないため、自分たちで、気をつけるしかありません。丈夫な身体を作るため、規則正しい生活をして、口からうつる可能性が高い病気ですので、手洗いやうがいを頻繁に行いましょう。

